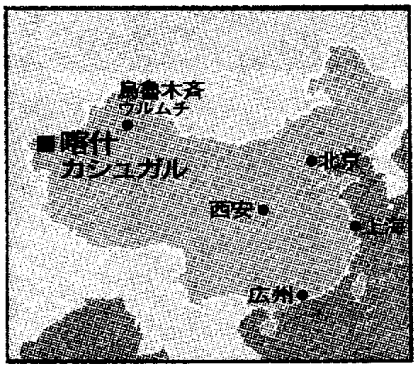
【研究ノート】

カシュガル国小史

小林惣八

プロローグ

シルク・ロードが私を呼ぶ
天山山脈、タクラマカン砂漠、パミール高原
ウルムチ、トルファン、クチャ、カシュガル
張騫、班超、鳩摩羅什、玄奘三蔵、マルコ・ポーロ



ウイグル語で「玉の市場」と呼ばれるカシュガルは、シルク・ロード西域北道（天山南路）と西域南道が交わるオアシスで、古くから東西交易・交流の要の役割を果たし、今日にいたるまで内陸貿易の中心地として光彩をはなってきた。本稿では、カシュガルの略史に触れ、その現況にも触れるものである。

カシュガル国小史Ⅰ

今日の新疆ウイグル自治区最西端に位置するカシュガルは、漢字で喀什と記される。喀什はカーシーと発音する中国語で、

喀什噶爾の前半だけを取った中国式呼称で呼ばれている。古くから東西交易の拠点として栄え、ウイグル族と漢族のほか居住している少数民族は十五を数える。まさに東と西のせめぎあいの中で生きてきたオアシス都市なのである。

カシュガルについての最も古い記録は『漢書』の西域伝である。その記録によると――疏勒国は、王が疏勒城に治し、長安を去ること九千三百里、戸数千五十、人口一万八千六百四十七、勝兵が二千人。東の都護まで二千二百十里、南は莎車まで五百六十里、市場に店が列なり、西は大月氏・大宛・康居への道に当たっている。農耕牧畜を生業とし、五穀・果物類を産す――とある。

この記述からカシュガルは、前漢の時代（前2世紀）疏勒国と呼ばれていたことが解る。また特異なものに「市場に店が列なり」と出ている。『漢書』西域伝には、五十余国のオアシス諸国の記述があるが、「市場に店が列なり」と記されているのは疏勒国のみなのである。現代で言うバザールのことである。疏勒国、すなわちカシュガルは、人口二万足らずの中堅国でありながら東西交易の要に位置しており、二千年以上前からバザールの盛んな事で知られていたのである。

古代の疏勒国を語るとき、次の人物を忘れてはなるまい、シルク・ロードの開拓者張騫[1]である。彼は、匈奴討伐のため、七代武帝の命を受けて烏孫国との同盟を結ぶために西域に派遣された人物である。彼の目的は失敗に終わるのだが、彼が見聞した西域の風物詩は、武帝はおろか百官万民にいたるまで喚起し、憧れすらおこすことになる。ところが『漢書』西域伝や張騫伝をいくら紐解いても疏勒国の地を訪れたという記事が見当たらないのである。伝聞によれば、烏孫国は天山の西の国であり、天山山脈と崑崙山脈の間に挟まれたタリム盆地は、東西千四百キロ、南北五百キロという広い地域で、その中にタクラマカン砂漠があり、オアシス都市がそれを囲んで環のようになっている。疏勒国はその環の最西端にあるのである。その環から抜けて外へ行くには、疏勒国を起点としなければならず、張騫は間違いなく疏勒国の地を訪れ、その賑わいに目を奪われたに違いない。私もこのバザールの賑わいには実際驚かされた。

西暦八年、王莽、漢を簒奪し、新王朝を建国。内外共に混乱し西域諸国は自立するか匈奴に従うかの選択を迫られた時期で

ある。西暦二五年、後漢が復興。建国当初国内の政情不安から西域への積極的介入は見られなかった。西域諸国もまた群少政権の弱肉強食の時代で、莎車や于闐が強盛を誇っていた。疏勒国はと言うとバザール立国であまり強くはなかったようである。

後漢も四代和帝時代に入ると、ようやく内政も充実し、積極的に西域へも目を向けるようになる。この時期、西域における立役者といえば――虎穴に入らずんば虎子を得ず――の諺で有名な班超[2]をあげることができる。班超は、西域に在って、王莽以来廃止されていた西域都護を復活。匈奴の勢力を西域から駆逐し、西域諸国を慰撫した最大の功労者である。彼も度々訪れたであろう疏勒国の現状はと言うと、西域最大の国亀茲に屈しており、まことにもってバザール大国も政治力は弱かったようである。

班超の人と為りを表すエピソードを一つ、彼が任期を終え部下の任尚と交替するときのこと――任尚に曰く、貴方は性格が厳正すぎるようだ。水の清いところには大魚はいないし、厳格な政治は下々の和を得ることはできぬ。だから何事もオットリと、また簡単にすませ、小さな過失は見逃して、ただ、ことの大綱だけはシッカリと握って行くように…――と。一方任尚はと言うと――自分が思うに班超は西域経営にあたって、何か常人の考えの及ばぬ奇策を持っているのかと思ったがその言うところはなんと平々凡々なことよ…――と。数年後、西域に反乱がおこり任尚はその罪に問われて帰還することになる。班超が戒めた通りとなったのである。

カシュガル国小史Ⅱ

後漢末より、魏晋南北朝時代（3世紀前半～6世紀前半）、隋唐の統一（五八一～九〇七）の世にあってカシュガルの動向や如何に。この時期カシュガルについての記事は少なく『魏志』・『晋書』・『魏書』西域伝に散見するのみである。この時期の西域は、「仏教の道」としての色彩が強く、求法取経の仏僧として、東晋の法顕や亀茲の鳩摩羅什[3]、北魏の宋雲や恵生[4]が訪れ

ている。しかし、カシュガルの地までは足を延ばしていないし、したがって町のようすまでは解らない。ようやく『隋書』西域伝に、カシュガルの使節が隋朝に入貢したことが記されている。『新・旧唐書』西域伝によると――疏勒国、勝兵二千――などとやや具体的な史料が登場する。その最たるものが玄奘三蔵[5]の『西域記』であろう。その佉沙国条に――佉沙国は周囲五千余里、砂漠が多く土壌は少ない。農業は盛大で花、果物が多い。気候は穏やかで風雨は順調である。人の性質は乱暴で、偽りが多く、礼儀は薄く学芸は平凡である。篤く仏法を信じ、福徳利益の行に精励している。伽藍は数百カ所、僧徒は一万余人を数える――とある。

七四七年、カシュガルの町が戦禍にまきこまれる。カシュガルの西タラスの町でイスラム帝国軍と唐軍とが激突したのである。この戦いで唐軍が破れたことは、政治的にも、文化史的にも大きな意味を持つことになる。それは、中央アジアからシルク・ロードの東側にかけて「イスラム教圏」になってしまったこと。またこの戦いでイスラム側の捕虜となった者の中に製紙職人がいたことが、ヨーロッパに製紙法が伝わるきっかけになったことである。

やがて安史の乱（七五五～七三六）を契機に唐朝は衰え、滅亡する。そして、五代の乱世（九〇七～九六〇）、宋朝の統一（九六〇～一二七九）を迎える。宋朝の統制力の弱さはやがて征服王朝の台頭を呼び起こし西域諸国は離反してゆく。そのうえ、バクダッドを都とするイスラム勢力の浸透とによって、シルク・ロードは危険で無秩序な状況を呈してゆくのである。このような不安なルートを避けてより安全な外洋を利用しようとするイスラム商人たちがあらわれ海の道は開拓されてゆく。中国南方の開港場（広州や泉州）の繁栄と反比例してシルク・ロードは衰微してゆくのである。

西域のイスラム化はこの時期に端を発すると言われている。現在、この地に仏教の痕跡がほとんど残っていないのは、イスラム教が、改宗に厳格なことや偶像崇拝を禁じているために仏像などが破壊されたことによると言われる。

カシュガル国小史Ⅲ

シルク・ロードは、昔日の面影は失われたものの全く衰えてしまったわけではない。治安が回復されると、隊商がラクダを連ねて西域の南北道を往来したのである。

十三世紀、再びカシュガルの地を不安と恐怖が襲った。チンギス・ハン[6]の西征である。この西征は、破壊につぐ破壊をもってしたのである。その犠牲となったのはブハラ、サマルカンド、パルク、メルヴ、ガズニ、ヘラートなどの諸都市であった。カシュガルはと言うとこの西征から僅かながら逸れていたので胸をなでおろすことができた。しかし、西征後の分封ではチャガタイ・ハン国（察合台汗国）に属し、その版図は西域の南北道を含む大帝国であったため、治安は良くなく常に内訌に苦しんでいたようである。一三二一年チャガタイ・ハン国は東西に分裂、東チャガタイはカシュガルを都としたことから、カシュガル・ハン国と呼ばれ、西チャガタイはブハラに中心地を置いたことからブハラ・ハン国と呼ばれた。この時期のカシュガルは、短期間であれカシュガルの名を冠することができたことは画期的なことと言わねばなるまい。それは単なるバザール立国からの脱却を意味するからである。大国于闐も亀茲もみなカシュガル・ハン国に含まれていたのである。一方、西チャガタイ・ハン国、すなわちブハラ・ハン国は内訌に明け暮れ、混乱の中からティムール帝国（一三三六～一四〇五）[7]に滅ぼされる。

これより早く、一二七三年（至元十）カシュガルの地を通過したイタリアの旅行家マルコ・ポーロ[8]の記事を紹介しておこう。『東方見聞録』カスカール王国の条に――往年のカスカール（合失合児）は独立王国であったが、現在ではカーンの属領をなしている。住民はイスラム教を信奉している。都市、集落が多いが、中でも最も大きく立派なのがカスカール市である。この国は東方と北東方との間に位置している。住民はもっぱら商業・手工業を生業とするが、その反面、みごとな花園・果樹園・農場をも所有している。国土は肥沃で、あらゆる生活必需品が豊富である。アサ・アマとあわせて木綿の産出がすばらしい。この国の商人は世界各地に出向いて貿易に従事する。しかし、住民はいったいに貧弱で飲食ともに粗末である。この地に在住

するトルコ人の間に、少数ながらネストリウス派キリスト教徒がおり、教会一個を維持しその教法を守っている。住民の使用する言語は独特のものがある。この国の広さは五日行程の範囲である――。

その頃、中国では元朝（一二七一～一三六八）が倒れ、朱元璋が明王朝（一三六八～一六四四）を建国。第三代永楽帝のとき先のティムールと臣下の礼を結んでいる。しかし、第二のチンギス・ハンたらんとするティムールの野望のために相互に険悪となり、ここに一触即発の危機をはらむことになる。一四〇四年二〇万を動員したティムールは都サマルカンドを出発した。が翌年病没。明と戦うことなくむなしくサマルカンドに引き上げたのである。この国家は後継者争いが続きまもなく滅亡する。

明朝と西域諸国との関係は進貢使節の往来など間接的な交渉はあったようである。カシュガルはと言うと、ティムール全盛期には通婚政策によって姻戚関係を結びかろうじて半独立の地位を保っていたようである。

ティムールの子孫たちは、十五世紀後半、ウズベク族に圧迫されてその一部はインドに南下してムガル帝国（一五二六～一八五八）を建国。十六世紀初頭の中央アジアでは、シェイバニ王朝が君臨、やがてコーカンド・ハン国、ブハラ・ハン国、ヒヴァ・ハン国に分裂。東端に位置するコーカンド・ハン国はすでに明朝を滅ぼした清朝に服属していたのである。

通婚政策でティムールの嵐を切り抜けた東チャガタイ・ハン国の子孫たちは、カシュガルをはじめ、ヤールカンド、トルファンなどタリム盆地周辺のオアシス都市で、それぞれハンあるいはスルタン（首長の意味）と称していたのである。『明史』西域伝には、西域諸国で「王」と称するものが百五十余人もいたことを記している。これら子孫たちは、分散して、団結しなかったことが幸いし、明や清に服属して存在し続けたのである。こうして各地の東チャガタイ・ハン系のハンや王は、ほとんど有名無実となってしまったのである。十七世紀になると、西モンゴル系のオイラート族のバートゥル・ホンタイジが同族を平定し、息子ガルダンの代になって、近隣諸国を滅ぼし、ジュンガル（準噶尓）王国（？～一七五八）を建国したのである。この期に清朝四代康熙帝は自ら親征してガルダンを討ち（一六九六）、西域諸国をジュンガルの手から解放し、清朝の領域としたのである。翌年ガルダンは病死。その後十年にわたって両国は対立を続け、一七五九年ジュンガル王国の支配下にあった東ト

ルキスタン諸国を平定。一七七一年ジュンガル王国、清朝に服属する。

その後のカシュガルは、清朝時代の疏勒州、中華民国の疏勒県を経て、解放後の一九五二年に市制が布かれ、以来、南疆地区の中心都市となる。

註

(1) 『史記』一二三巻大宛伝、『漢書』六一巻張騫伝、桑原隲蔵『張騫の遠征』(東西交通史論叢所収)
(2) 『後漢書』七七巻班超伝、『同』一一八巻西域伝
(3) 『出三蔵記集』二巻、一五巻法顕伝、『梁高僧伝』三巻法顕伝、長沢和俊『法顕伝』東洋文庫一九四
『出三蔵記集』一四巻鳩摩羅什伝、『梁高僧伝』三巻鳩摩羅什伝、『晋書』九五巻鳩摩羅什伝
(4) 『洛陽伽藍記』五巻、『魏書』一〇二巻西域伝、『同』一一四巻釈老志、『洛陽伽藍記』(中国古典文学大系所収)、長沢和俊『宋雲行紀』東洋文庫一九四
(5) 『慈恩寺三蔵法師伝』、『読高僧伝』四巻、前嶋信次『玄奘三蔵』岩波文庫
(6) 『元朝秘史』、『元史』一巻太祖紀、『新元史』一巻序紀、小林高四郎『チンギスハン』岩波文庫
(7) 羽田　亨『帖木児と永楽帝』(羽田博士史学論文集所収)、植村清二『帖木児の自伝について』蒙古八―一
(8) 岩村　忍『マルコ・ポーロ』岩波文庫

新疆ウイグル自治区の現況

新疆ウイグル自治区は、広大な中国の六分の一を占める最大の省区である。西側は、インド、パキスタン、アフガニスタン、タジキスタン、キルギス、カザフスタンに隣接し、なお東側をモンゴルに接するとりとめもなく広漠とした地域である。北側には天山山脈とジュンガル盆地、南側に崑崙山脈が、そして中心部にアジアの心臓と呼ばれるタリム盆地(タクラマカン砂漠)が横たわる。

かつて、この地域は漢民族によって「西域」と呼ばれ、多くの民族が興亡してきた。現在、新疆ウイグル自治区には、ウイグル族（約七百万人）、漢族（約五百万人）、カザフ族（約百万人）、回族、モンゴル族、キルギス族など四十を超える種族が住んでおり、まさに民族の坩堝なのである。

カシュガルの現況

新疆ウイグル自治区の省区ウルムチ（烏魯木斉）から飛行機で一時間四五分の旅。

現在カシュガルの人口は二七万人で、ウイグル族が六八％、漢族が二二％を占め、残りの一〇％は十五の少数民族で構成されている。宗教はイスラム教が主流で、全人口の七四％がイスラム教徒だ。面積は九八㎢、年間降雨量六〇～八〇㎜と、日本の一カ月にも満たない量だが、天山山脈から流れ出てくる雪解け水により水量は豊富だ。そのために農業が主要産業として成り立っている。平均気温は最も寒い一月でマイナス六・四度、最も高い七月で二五・八度と厳しくない。町にはポプラ並木が続き、ロバが行き交い、矢が刷りの民族模様のワンピースを着た女性が行き交い露天の店ではナンやシシカバブーが売られている。

解放路の両側にはバザールと職人街が、ナイフ、ウイグル帽、鳥打ち帽、金属食器、シルク刺繍のあざやかなチョッキ、背広の布地、仕立て屋、アクセサリー、民族楽器、木工細工などの店が所せましと並んでいる。そこには、今なお手作り職人芸にこだわる人々の生活がある。しかし、年々少しずつ変わってきており、今ではインドやパキスタンの製品を並べる店もある。

現在、西暦二〇〇〇年の完成を目指して鉄道工事が進められている。シルク・ロードの旅も大いに変わることだろう。

この小論は、平成一〇年度駒澤大学高等学校短期国外研修報告書の抜粋であることを付記しておく。